モモ 夏休みの活動

いよいよ夏休みが始まりました。学期中のモモでは、放課後((幼児さんと不登校の児童さんは午前中や午後から一定の時間))から 17 時 30 分までが教育時間ですが、夏休みは午前 9 時 30 分から午後 15 時 30 分までたっぷり時間がとれるため充実した体験活動が行えます。事前に子どもたちに夏休みにやってみたい活動を聞きました。

「幼児さんのための砂場作りがしたい」「もう一度化石を取りに行きたい」「魚釣りをしたい」「モモでキャンプをしたい」「動物園にいる大好きなインコを見に行きたい」「カブトムシやクワガタムシを採りに行きたい」などそれぞれに希望を語ってくれました。子どもたちの願いをかなえるべく、私たちも童心に返りワクワクしながら次のような計画を立てました。最後の日本ミツバチの採蜜や蜜蝋作りはモモの年間活動の大切な催しで、保護者や関係者もいっしょに加わって行いました。

1. 幼児さんのための砂場作り、2. 洞窟探検、3. モモでのデイキャンプ、4. 竹筆作り、5. 施設での体験(交通公園、運動公園、プール)、6. 化石探索、7. 動物園、8. 川や海で釣り竿での魚釣りや網による魚とり

では、順に個々の活動を紹介していきます。

1. 砂場作り



私たちの施設には2歳の幼児さんがいます。その子はいつも小学生のお兄ちゃんの活動を食い入るように見つめ、懸命にあとをついて行っています。小学生たちにとってその子はかわいらしい大切な存在になっています。その幼児さんに砂場を作ってあげたいという彼らの願いを、「木工のエポック授業(長期間継続して取り組む課題学習)」として取り組みました。

まず、モモの庭に砂場を作る場所を定め、枠に沿って土を鍬やショベルやスコップで掘っていきま

す。2週間くらいかけて砂場の穴が完成します。 その後、私が作った設計図を元に、材料の買





から、めあての木材、ネジ、ペンキ、はけ、防草シート、除菌砂を子どもたちと見つけ出します。高学年の児童は私と一緒に重たい荷物をカートに積み込み、低学年の児童は小さな物 を買い物かごに入れ、荷車を押してくれます。



皆このような大きな材料を買うのは初めてのようで一つひとつの買い物に興味津々でした。とくに 木材を電動の切断機で切ってもらう際は体を乗り 出しその作業に見入っていました。

これらの材料をモモに運び、その日から3日間かけて砂場作りをします。

初日は、買ってきた木材に防腐効果のある塗料を ハケで塗ります。二日目は、ペンキが乾いた木を組

み立てていきます。釘などが表に出ないように木の側面からネジで留めていきます。三日目は、掘った土の上に防草シートを貼り、その上に除菌砂を入れていきます。これで手作り砂場の完成です。さらに、夏の熱い日差しを避けるため、庭の木と木の間に遮光タープを張り、砂場に日陰を作ります。幼児さんが来る日に合わせて砂場で遊ぶおもちゃをそろえ、みんなで砂遊びをしました。いまでも室内での学習や教育が終わると、外遊びの時間に幼児さんを囲んで砂場で遊ぶ光景を見かけます。











2. 洞窟探検

私たちは熱をどのようにして感じるのでしょうか? モモでは熱感覚の授業を行った後、その感覚を実際に感じ取ってもらうために平尾台 (カルスト台地) にある千仏鍾乳洞に行きました。

まず、熱感覚の実験は、私の子どもがオーストラリアのシュタイナー学校で受けたものを

参照して行いました。はじめにモモの部屋のテーブルの上に3つの入れ物を置きます。中央には普通の水、左には氷水、右には熱いお湯を置きます。子どもたちに左右どちらかの入れ物に手を入れてもらい、その後、その手を中央の水に浸します。初めに冷たい水につけた手は中央の水を温かく感じます。熱い湯につけた手は中央の水を冷たく感じ

ます。子どもたちはその不思議さに大騒ぎです。真ん中の水の温度はまったく同じですが、比較する物とのギャップが冷たいとか温かいと感じ分けることになります。つまり、温かいとか冷たいとかは実は均質な感覚ではなく、温度差ギャップによって感じるということを学びます。この体験の後に、平尾台の地層について学習をした後に、平尾台にある鍾乳洞で水の中を歩く体験をします。

千仏鍾乳洞を歩く



お昼前に、カルスト台地平尾台(北九州市小倉南区)にある千仏鍾乳洞に向け出発しました。主な目的は、温度(高い外気温と水温)の落差によって熱感覚が働く(かなり冷たく感じる)ことを鍾乳洞で体験することです。ほかに、鍾乳洞の成り立ちや形について学んだことを実際に観察し、洞内の道程を楽しんでもらうことをねらいました。もうひとつ、重視したのは、体力作りでした。駐

車場から鍾乳洞まで、行きは下り、帰りは登りの長い道を歩かなければなりません。それに、 鍾乳洞自体も往復 1.8km あり、その長い道のりを、背中をかがめたり、水につかったりし ながら、頑張って歩き通さなければいけません(入り口から約 500mすぎた後は水の中を歩 いて進みます)。



子どもたちの中には、心臓が悪い子どもや冷たい水に入ることが苦手な子どももいました。モモでは、子どもがもっている(自覚している)体力・知力・精神力をサポートすることで少しだけそれらの力を広げ、強くしてあげることを、日々の教育活動を通して実践しています。ただし、教育方針は「スモールステップ」が原則で、いっきにその達成を急ぐと歪みが来ます。この繊細な判断に「教師の深い洞察

力」が求められます。様々な生きづらさをもつ子どもたちがモモの教育に参加し、「楽しい!毎日でも来たい!」と言い、保護者が「子どもが大きく変化・成長しました」と語るのは、そのような教師の人間洞察に基づく指導・実践がうまく機能しているからだと思います。最初に紹介した心臓の弱いお子さんは、モモに通い始めたころ、施設に上がる 20 段くらいの階段を一気にのぼることができず、途中で立ち止まって休憩していました。それが半年、一年と経過し、いまでは階段を駆け上がって元気に通所できるようになり、郊外に出た際は野山を楽しそうに走り回っています。彼の主治医も心臓の状態が通常の人並みによくなっていることに驚かれているようです。

では、今回の鍾乳洞体験ではどうだったでしょうか? 私は、彼の体調に最大の配慮を払って臨みました。彼が少しでも疲れたらおんぶをして最後まで体験させてあげようと思っていました。でも、心配は杞憂に終わりました。彼は長い鍾乳洞の道のり(往復約4km)のうち、最後の駐車場までの坂道を100mだけ(坂道もそこまでは自分で上りました)おんぶされただけですべて自分の足で歩き通しました。鍾乳洞の中だけでも3.2kmあり、水に浸か

りながらの上り下りも大変な中、とても生き生きと楽しそうに最後まで歩き、充実感でいっぱいのようでした。

もうひとりの冷たい水に入ることが苦手な子は、少し水に浸かっては私に抱っこされる ことを繰り返しながら最後まで往復することができました。この洞窟探索では、ふだん弱い 子が頑張り通せたり、いつもは強気の子どもが弱さを見せたりと、いろんな発見がありました。洞窟探検のあとは、平尾台の涼しい風に当たり、皆いい表情でした。

千仏鍾乳洞









ゆー遊広場

3. モモでのデイキャンプ

子どもたちが楽しみにしていたデイキャンプをモモで開催しました。食事は、みんなが大好きなカレーです。手分けをして食事の準備をします。

まずは、ピーラーでジャガイモや人参の皮をむき、包丁でそれらとタマネギ、お肉を切っていきます。初めての子どももいましたが、みんな一生懸命に作業してくれました。

つぎは煮炊きをします。本当はモモの庭で行う予定でしたが、雨のため室内で飯盒炊飯を 含めた煮炊きを行いました。





飯盒炊飯はあまりやったことがなかったようで、みな興味津々でした。まず、外ぶた(3



号)と中蓋(2号)を使って米の分量を量り、 入れたお米を水でとぎます。炊飯用の水の量 は、飯盒に手のひらを浸け、くるぶし辺りま でとしました。

つぎにコンロに火を付け飯盒を炊きます。 初めは弱火で蒸気が出るくらいまで炊きます。 湯気が出始めると、強火にし、蓋から吹きこ ぼれないように重しを置きます。釜での炊飯 で昔から言われたあの言葉、「初めちょろちょ ろ、中ぱっぱ、赤子泣いてもふた取るな」を解

説しながら様子を見ます。



「そろそろできあがりかな」と伝え、蓋を取ってあげます。子どもたちは顔を寄せて、みんな蓋

の中を見守ります。ふっくらとおいしいご飯が炊き上がったのを見て、大喜びです。





カレーの煮込みも手伝ってくれました。アク取りをし、ローリエで香り付けをした後に、 ルーを入れて完成です。カレーができあがるころにはお腹が減って、食べるのが待ち遠しそ うでした。それぞれにほしいだけご飯とカレーをよそい、いよいよ昼食タイムです。







みんないつものお弁当の何倍も器によそい、「おいしい!」と楽しそうに食べていました。たくさん食べる子は、大盛りカレーを 5 杯食べてました。

自分たちで作ったカレーやご飯はさぞおいしかったことでしょう。雨で家の中での飯盒炊さんとなりましたが、みな、大満足のようでした。

4. 竹筆作り



デイキャンプのアクティビティとして、竹 筆作りを行いました。材料は、私の自宅から 切り出した筆に適した細い竹を利用します。 道具は、ノコギリとハンマーです。

はじめに、自分が使いたいサイズの竹を選びます。ノコギリを使うのが初めての子どもには、両サイドに付く「ノコ目」の違いと使い方を教えます。私たちが行うシュタイナー教育では、自らの手を使って様々なものを生

み出す体験を重視します。材料と道具があれば、自分の手と体を通して「生活に役立つもの」 や「美しいもの」を生み出すことができます。

つぎに、自分に合った筆のサイズに竹を合わせノコギリで切ります。道具を使うときは、 スタッフが一人ひとりの手元を注意深く見守り、支えながら行います。

つづいて、切った竹の先から5cmくらいを ハンマーでたたいていきます。初めは大きな 割れ目が入り、たたくほどに割れ目が細かく なり、筆の穂先ができていきます。力加減が むつかしく、20分近く丁寧にたたく時間のか かる作業です。

その後、見ていると、年長の児童が、できた筆を軒下にできた水たまりに付け、乾いたコンクリートの床に習字のように文字を書いて遊び出しました。



それぞれ自分で作った竹の筆ですばらしい字を書いていました。





8月6日 広島原爆について学ぶ-絵本『まちんと』を読む

この日はちょうど広島に原爆が投下された日なので、子どもたちに原爆にかかわる絵本『まちんと』を読んであげました。このお話しのストーリーはこうです。原爆で被爆した3歳の小さな女の子が命尽きようとするときに、母親がトマトを少女の口元に運び、少女はおいしそうに食べました。でも、もう少し食べたいと思い、女の子は、「まちんと(もうちょっと)」「まちんと」と母親にお願いします。母親は焼け野原の中でトマトを探しますが、お店も皆、爆風と熱でなくなり、どこにもトマトは売っていませんでした。それでも探しつづけ、やっとの思いで1つのトマトを見つけることができました。しかし、母親が少女の元にトマトをもって戻って来たとき、女の子は命尽きていました。それから広島の空には、「まちんと」「まちんと」とさえずりながら飛ぶ鳥を見るようになったということです。





施設での体験(交通公園、運動公園、プール) ☆交通公園

午後から、市内にある交通公園に出かけ、「夏休みの自転車レベルアップ教室」に参加しま した。自転車一般コースで車道走行や交通ルールの練習をしました。広々としたコースを、 風を切って走り、とても楽しそうでした。







☆グリーンパークと遠見ヶ鼻海岸へ

午前 10 時にモモに集合し、「水・緑・そして動物たちとのふれあい」をテーマにした北九州市内最大の公園「グリーンパーク」に出発。当日は、世界最長のブランコ、冒険の森、ジャブジャブ池、熱帯生態園、都市緑化センター(かぶと・くわがた&ほたるワールド)を楽しみました。









6. 化石探索

午後からは、若松区の北海岸にある岩屋・遠見ケ鼻に、新生代第三期の地層見学と化石探索に出かけました。







翌日も地層研究の続きで、門司区恒見にある石灰岩の巨大地層周辺で二枚貝化石を探したり、石灰岩の地層を見学に行ったりしました。石灰岩層近くは立ち入り禁止でしたが、学習目的で管理棟に依頼したら、快く案内していただけました。子どもたちは、巨大な石灰岩の地層を真下から見上げ、感動していました。

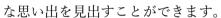






7. 到津の森動物園

動物園行きはひとりの児童さんの強い希望で実施しました。目玉は、オーストラリアなどに生息するキバタンというインコです。動物園にはキバタンが 2 匹いて、ともにオスで名前は、「リー」と「キック」。「おはよう」「こんにちは」などの挨拶をします。その児童は、動物園に着くなり、他の動物には脇目もふらず、「リー」と「キック」のコーナーめがけて一目散に駆け寄ります。そして、夏の熱い日差しの中でも 30 分くらい「リー!」「キック!」と名前を呼んで反応を楽しんでいました。大好きなお父さんとの思い出と重なっているみたいです。モモの子どもたちは皆、両親に大切に育てられているので、お父さんやお母さんが大好きです。モモでの子どもたちの活動の随所にその愛情でつながれた両親とのすてき









8. 川や海で釣り竿での魚釣りや網による魚とり ☆かぐめよし少年自然の家

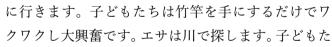
この夏、子どもたちは両親の故郷などに帰省し、カブトムシやクワガタムシをたくさん採ってきました。モモではそれを皆で披露し合っていました。そして、最終的には、私たちの時代と同様に、テーブルの上は、昆虫たちの内どれが強いかを試す戦いの場となっていました。子どもたちの中には虫取りの得意な子がいて、北九州の町中にカブトムシがいる場所があると教えてくれて、そこに皆でカブトムシを採りに行きました。それはモモの子どもたちの秘密の場所となり、今年も皆で採集に出かけます。



☆河内・大蔵で川遊び

この夏に皆がぜひ行きたいと言っていたことのひとつに魚釣りがあります。竹竿や釣り竿を使って海や川で釣りをしたり、川で網を用いて川岸に魚を追い込み、すくったりしました。

釣り竿での釣りは、まず、竹で竿を作るところから始めます。それに糸とウキを付けて川











って安全に行動できました。

ちは、エサは買う物だと思っていますが、 自然界での捕食の仕組みを教え、川では、 魚たちは川虫(トビケラやカゲロウの幼 虫)を食べていることを伝えます。それか ら実際に川に入り、川虫探しです。少し大 きめの石を裏返し、そこに川虫が付いて いることを教えます。しかし、その日はま だ少し水温が低いかったためかあまりい なく、2 匹だけ見つけることができました。

さあ、それをエサに付け、川釣りです。 釣りのポイントや安全については、その川 に詳しい元小学校教員の友人高崎聡さん に指導してもらいました。子どもたちには、 「私の友だちでとても川に詳しい先生が いて今日はその先生が教えてくれるよ。た だ、その先生は約束事を守らないととても こわいよ」、と事前に伝えていました。友 だちには申し訳ないですが、「厳しい先生」 効果はてきめんでした。子どもたちは先生 の話を緊張気味に一生懸命聞き、約束を守

竹竿での釣りでは魚の収穫はありませんでしたが、子どもたちは自然の中で時間を忘れて釣りに集中し、とても満足していました。

網での魚すくいは、初め、「自分で魚がいそうなところを探してすくってみてごらん」と伝え、子どもたちは自分で考えながらチャレンジします。しかし、なかなか網に魚は入りません。そこで先生が魚のいるポイントを教えてあげます。「川がカーブして流れが緩くなる草の茂ったところがあるでしょう。そこを川下からそっと上っていって網を草の根元のあたりに垂直に入れて揺すりながら前に進んでごらん」。子どもたちは言われたとおりに実践



すると、網に魚が一杯捕れ、大喜びです。子 どもたちは夢中になって時間を忘れて魚捕 りを楽しんでいました。

「自然」や「遊び」と自分がひとつになる 体験ほど、子どもの成長にとってかけがえの ないものはありません。そうした密な時間を 過ごした子どもは、知育によって頭だけ鍛え





られる子どもや、周囲の期待を受け、 「いやいや」課題に応えつづける子 どもたちとはまったく心身の成長 を異にします。人間の心は、思考・ 感情・意志で構成され、とりわけ「生 きる力」は、「自らしたいと欲する意 欲 | に根ざし、「豊かな感動 | に支え られ、主体的な実感を伴った「思考 (考え・判断) | へとつながります。 そして、こうした心の充足こそが

身体的な健全さと密接にかかわり

をもちます。逆に、周囲の期待に応えようと 「いやいや」行うことがつづけば、小さいこ ろは「よい子」として頑張って振る舞います が、思春期に入り自我がより活性化し始める と、自我と心の抑圧のギャップから、心身の 不調をもたらすことになります。そして、そ うした心身や自我(自分らしさ)の抑圧が、 青少年による凄惨な事件を引き起こし、「荒 れる」「キレル」「不登校」などの学校病理を 生んでいるのです。

モモの子どもたちがモモでの活動を通し

て心身の開放と充足により快活になり、それまでの問題や課題を克服していっているのは こうした知情意・身体・モラルを総合的に育成するホリスティックな教育法の効果だと思わ れます。

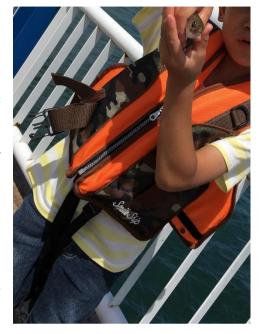
海釣り体験

釣り体験の締めくくりはリールを使った海釣りです。海に出かける前に、リールの付いた 釣り竿の投げ方やリールの巻き方を事前に練習します。釣りの大好きな子どもはリールの 感触が気に入り、モモの庭で何度も何度も繰り返し投げ方の練習をしていました。

当日は、アジをサビキで釣るため、午前中、釣具屋にエサのアミを皆で買いに行きました。 釣り場に着いて、釣り具をセットします。いよいよ海釣りの実践です。本物の海を前にして、 モモの庭での練習と少し勝手が違うようで、戸惑っていました。しかし、少しだけサポート すると、練習通り投げることができました。幸運にも、釣りが一番好きな子どもに最初の当 たりが来て、みごとアジを釣り上げることができました。釣りが好きとはいえ、お父さんに 連れて行ってもらうだけで自分で釣ったのは初めてのようで、とてもうれしそうでした。大

漁で、皆、自宅にたくさんの魚を持って帰ることができました。

その後も、彼はモモで竿を使って投げ釣りの 練習をつづけました。モモでは、その子が本当 にやりたいことは少し危険でも、安全を見守 り、1ヶ月くらい続けさせます。1ヶ月経ち、 心が十分満足したころに、「そろそろ釣り道具 は仕舞って、また来年の夏に出して使おうね」 と言って片付け、つぎの課題にスムーズに移っ ていきます。ここでもモンテッソーリが言う 「(興味の)階段を上り、満足すれば必ず下りて くる」という言葉の正しさが理解されます。多 くの大人たちは、子どもの強い関心を自分の判 断でさえぎることがしばしばあります。そうし



た行為の繰り返しが子どもの心に抑圧を生み、さまざまなゆがみをもたらします。「充足すれば自立に向かう」という教育の真諦を私たちは理解して教育に臨まなければならないように思います。

